

# ダブルケア調査・研究から見た ケアラー問題とケアラー支援の現状

横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授 相馬 直子

## ◆ダブルケアとは

ダブルケアは、ケア負担や責任が特定の人に集中してしまうことをいいます。晩婚化、晩産化、高齢化、長寿化の進展、また、きょうだい数が減少して核家族化が進行し、親族ネットワークが縮小することによって、ケアを分担したり分かち合う家族・親族が減少することで育児と介護という人生のイベントの重複可能性が高まっていて、その時間も長期化しています。

育児と介護が同時進行するときの責任・負担・ニーズも複合化しています。そのため親密な関係下において、複数のケアに関わるマネジメントや決断、精神的・物理的・経済的なサポートなどで異なるニーズが重なります。そして、地域関係の希薄化、労働市場の不安定化、さらに、縦割りの社会福祉制度によってダブルケアが困難になるといった状況があります。

少し具体的に見ていきたいと思います。コロナ禍における生活困窮ダブルケア世帯のYさんの事例です。小学4年生のお子さんが、コロナ禍で家庭学習になりました。勉強も難しくなり、学習についていけない部分もあります。また、義理の両親とも、デイケア・入浴介助が利用できなくなりました。妻はコロナ禍で仕事が減り、家計が減少して心労が重なっています。夫のほうも、コロナ禍以前より失業し心労が重なっています。この場合は妻が働いて、夫が家庭でメインにケアしている、メインケアラーの役割を担っているので、夫と妻の心労の重なりが非常に高まっている世帯です。貯金がわずかとなり、どこにどう相談すればよいのかも分かりませんでした。生活困窮自立支援制度などいくつか制度がありますが、どのような制度があるのか情報もお持ちではなかったもので、代替支給、生活困窮自立支援制度の支援員につなげて、引っ越しの支援、生活資金の貸し出し、あるいは子育て支援と介護の対応について、サポートが入り始めているような状況です。

## ◆ケアの世代間連鎖

さて最近、ヤングケアラーという言葉をよくお聞きになることがあると思います。政府においても、ヤングケアラー支援がダブルケアラー支援以上に大きく扱

われているように思います。成蹊大学教授の澁谷智子さんの研究を見ていますと、ヤングケアラーは、子どもの視点から見ればヤングケアラーですが、ヤングケアラー世帯を見てみますと、ヤングケアラーもダブルケアラーの母親と共に孤立しているということが分かります。

神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会と横浜国立大学が連携して行ったダブルケア調査結果（2016）では、ダブルケア経験者が20パーセント前後。数年先にダブルケアに直面するという方が15パーセント。大体、36パーセントぐらいの割合でダブルケアの方たちの出現率が確認できました。また、グランドダブルケア、すなわち孫支援と介護のダブルケアという意味での経験者は約30パーセント。数年先に直面するという方が7.7パーセントぐらいで、ダブルケアと同様、グランドダブルケアの出現率も、約40パーセント弱の方たちの存在が確認されました。ですので、現代においてヤングケアの問題、また、30代から50代のダブルケアの問題、そして中高年の孫支援と介護のグランドダブルケアの問題。こうしたケアラーの問題をケアの世代間連鎖の問題としてとらえていくことが必要です。

## ◆ダブルケアラーのニーズ

さて、調査から見えるダブルケアラーの方たちのニーズをご紹介したいと思います。緊急時に利用できる一時保育や保育所の優先入所など、保育サービスのニーズ。そして、保育所とデイケアの送迎時間をそろえてほしいという、保育サービスと介護サービスの運用レベルのニーズ。縦割り制度の連携、ダブルケア相談窓口や情報支援など、包括的な対象別ではないケア単位での総合窓口や情報支援。また、毎日、あるいは定期的にいらっしゃるヘルパーさんやケアマネージャーさんに精神的にも支えられたといった当事者の方たちの声も多く聞かれています。働き方、企業側の問題、教育のあり方。そして当事者がつながり、思いや悩みを共有できる場として、ダブルケア問題の地域・社会的認知をまず高めること。そして、地域寄り添い型ダブルケアラー支援や支援ネットワーク構築の必要性など

が、浮かび上がってきました。

### ◆ダブルケアの社会的認知の拡がり

2015年、国会の予算委員会で、ダブルケアの問題が日本のこれからの社会的リスクとなること、縦割り制度の見直しに関する質問が提出されました。また、地域支援、男女共同参画の女性活躍、あるいは女性の就業継続といったテーマに対する政府の問題意識のもとで、ダブルケアの問題が表面化された年だったと言えます。2016年には、内閣府がダブルケアの実態調査を提唱して、厚生労働白書にて初めてダブルケアが言及されました。そして2018年3月、地域包括支援センターの運営マニュアルの総合相談支援業務の中で、ダブルケアも総合相談として一つの重要な事例であると追加されて、現在に至ります。

いま、働きながらダブルケアすることが当たり前前の社会システムの再構築は、急務な問題ではないかとも思っています。別件の調査から見ると、30代の2割は介護先行型ダブルケアラーになっています。結婚前、あるいは妊娠前、あるいは妊娠中に介護が発生して、その後、育児がスタートするという介護先行型ダブルケアラーというのは、これからも増えていくのではないかと予想しています。

ダブルケアの複合的な負担感については、これまでの調査でも浮かび上がったところです。精神的にしんどい、体力的にしんどい、子どもの世話を十分にできない、親・義理の親の世話を十分にできない、経済的負担、遠距離の世話、仕事との両立などです。

ダブルケアをしながら働く人たちに、ダブルケアと仕事の両立について、何を優先したいか、したかったかを聞きましたところ、例えば、仕事・育児・介護をバランスよく生活したいといった方が、男女ともに4割程度。女性の場合は、子育てと仕事、あるいは子育てを最優先したい。一方、男性の場合は、仕事最優先、子育てと仕事、子育て最優先、介護と仕事と、回答が少し分散していたのが特徴的でした。

こういった多様なダブルケアラーのニーズに応える形で、各地でダブルケアカフェ、あるいは地域ケア会議において、介護のみならず育児も含んだダブルケア

事例が、地域でも事例分析や議論の俎上に上がってきています。また、各自治体では、ダブルケア支援人材育成、ダブルケア総合相談窓口、情報集約、ハンドブック、実態調査、あるいは保育、介護サービスの制度基準の見直しなどが進んできています。

### ◆ケアをめぐる社会的背景

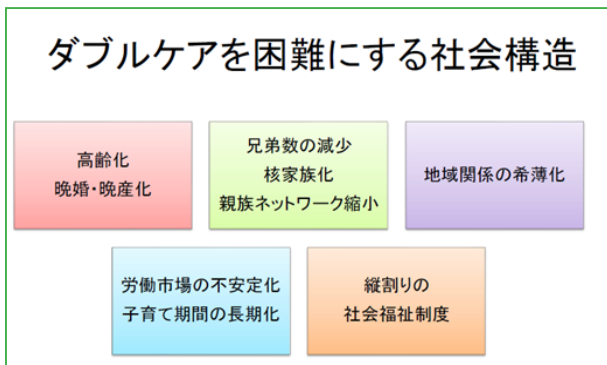
グランドダブルケアと介護のダブルケア実態から言えることは、長い間存在してきたケアをめぐる不平等とか不自由、あるいはさまざまな不均衡に十分に対応できてこなかったことです。そのためケアの責任が不公平に分配されてきました。ダブルケア、グランドダブルケア、あるいはヤングケアラー等に共通していません。特定の集団に集中的に付加されていることがダブルケアの問題だと言えます。特に女性は労働市場に流動的・不完全に参入しているため、ケアニーズがあると、家族ケア予備軍として、余剰ケア労働を実行する役割を担う経路依存に陥っています。非正規化がより進行している現在、女性にかかわらず、男性、若年の労働市場においても不安定な立場にある方たちの場合は、この問題がみられ、非常に深刻であると思っています。

女性の就業率が上昇しているにもかかわらず、この経路依存を抜本的に断ち切る社会的ケア支援、あるいは社会的ケア政策は行われず、保育制度の市場化や介護制度の再家族化が進行しているのが現状ではないでしょうか。生産性・効率性・有償労働を重んじる社会の中で、世代内の男女間、夫婦間の分担よりも、世代間の女性間の分担、つまり、中高年世代の女性のケア責任に転嫁され、世代内、ジェンダー間、あるいは世代間の不正義が再生産されていることも、このダブルケアの問題であるとも言えます。日本では、家事支援労働者が他の東アジア社会よりも抑制されている中で、特に中高年の女性が、娘・息子世代の子ども、さらに孫のケアまで抱えるダブルケアに、この制度的不正義が滞留していると言えるかもしれません。

### ◆ケアの豊かな地域社会

ダブルケアを考える視点として、ケア民主主義(Caring Democracy)、あるいはケアが豊かな民主主義という考え方があります。私たちがケアについて考えるときには、①どんなニーズが、②誰に対して、③誰がケアを供給すればいいのか、そして④ケアの質の視点からとらえることが多いかと思います。さらに⑤共にケアする、言い換えると、連帯・正義・公平の視点でケアの問題にアプローチしていければ、ケアの問題というのはまた別の方向に変わっていくのではないかと思います。

### ダブルケアを困難にする社会構造



ケアが豊かな地域社会とは、ケアが豊かな民主主義の基盤といえます。Caring Democracy を議論しているアメリカのジョアン・C・トロント教授の視点でもありますが、ケアの不足は民主主義の不足である、より人間らしくケアに満ちた社会づくりへ向けてケアの社会的認知・評価を上げていくことが、民主主義社会の形成につながっていくと考えています。そこで、当事者に近い支援者が当事者の葛藤・孤立を理解して、当事者を中心につながっていくこと。ダブルケアカフェなどダブルケア支援の地域的なネットワークの構築は、まさに、ケアが豊かな地域社会、あるいはケアが豊かな民主主義づくりにつながっているのではないかと思います。

#### ◆ケアの社会経済的価値を高める

コロナ禍で、あらためてケアワークの社会経済的価値を上げることの重要性が高まっています。今こそ地域のケア社会圏・経済圏・政治圏のあり方や、その連携を見つめ直すことが求められているのではないのでしょうか。このことがケアに満ちた地域社会、ひいてはケアに満ちた民主主義、Caring Democracy につながると捉えています。

高齢・障がい・子どもの領域におけるそれぞれの制度化が進んできましたけれども、ケアラー視点から見ると、より人間らしい子どもの生、よりケアに満ちた地域社会・民主主義社会をつくるためにはどうすればよいのでしょうか。ダブルケアというのは、一つは、ダブルケアがあるから働けないという労働からの排除を強めます。生活困窮ダブルケア世帯の増大につながる問題です。ダブルケアと仕事の両立困難、ケア責任・負担の複合化によって孤立したダブルケアラーは社会関係から排除されているともいえます。また、ダブルケアがあるから子どもをあきらめる、ダブルケアがあるから2人目をあきらめるという少子化のリスクにもつながっています。

また、基本制度の削減や不足、特に介護医療費が次世代への投資を抑制していて、子どもの学資もケアも解約して介護費用に充てるなど、子どもへのしわよせ、次世代への影響というのが、ミクロレベルでもマクロレベルでも生じているのが現状です。さらに、制度の非効率性として、複合化するケア課題に柔軟かつスピーディーに対応できない、縦割り制度の限界が顕在化しています。そこで、皆さんの現場など、柔軟なヘルパーさんのサポートによって、ダブルケア支援としては子育て支援と介護支援という、両方対応するような柔軟なサポートがなされている実態もあります。

ヘルパーさんにヒアリングをしたときには、子育て支援で入った世帯がふたを開けてみるとダブルケア世

帯であったというような声も聞かれることが多くなっています。この複合化するケア課題に柔軟かつスピーディーに対応できるような、複合的な制度対応が、今こそ求められていますし、それを可能にするようなケア政策の体系化、資格統合や養成課程の改革なども求められます。

ダブルケアの問題から、縦割りケア制度から社会的ケア制度、あるいは社会的ケアへの転換の視点、ダブルケアしながら人間らしく働くための社会設計のための養成課程改革、ケア共通資格化へ向けた議論の重要性、そして、ケアワークの適正評価・処遇改善によるケアの社会的・経済的評価を上げていくことなどの重要性が見えてきています。

#### ◆ダブルケアサポート構築へ向けて

そこで、どういう方向性で変革を考えていけばいいのでしょうか。一つは、市民社会をベースにした自治型・包摂型・多世代型地域ケアシステムの構築です。これは、当事者によるニーズの定義に基づいた、子育て、介護、障がいなど、領域を横断した包摂的な、多世代にまたがるケア関係を射程に入れたケアシステムを構想しています。ますます企業との連携も重要になってきていると思います。

また、ダブルケア問題の社会的認知、市民生活におけるケアの多様化・複合化を踏まえた政府・自治体によるダブルケアの実態把握の必要性、そして、各支援領域の連携、あるいは情報統合も必要です。各支援現場でのダブルケア視点の認知や、ダブルケア事例のケース分析やケースワーク、総合的相談機能、あるいは介護施設や保育施設の入所基準をダブルケア視点から引き続き見直していくことなどが求められています。

次に、ダブルケアしながら働くことへの支援、育児と仕事の両立支援、介護と仕事の両立支援です。ワーク・ライフ・バランスでいえば、第1ステージ、第2ステージにあたりますが、ダブルケアの視点からすると、ダブルケアしながら働くことへの支援ということで、さらに第3ステージの視点が求められることになります。出張型の相談、あるいはオンライン相談、産業カウンセラーの方たち、産業ソーシャルワーカーの方たちの重要性などが指摘されます。

そして最後に、介護・保育・子育て支援といったケアワークを包括的にとらえ、社会経済的評価を上げていくことが、豊かなダブルケア支援、あるいはケアが豊かな民主主義につながっていくと考えます。ダブルケア、ケアの複合化が負担ではない、人間らしい働き方・生き方が可能な社会を未来世代へ引き継ぐために、私たちは地域で、市民協働で非常に多くの課題を持ちながら活動していく必要があります。

(そうま なおこ)